

■ 取組による産地の優位性の発揮

うんしゅうみかんにおける気候変動影響として、浮皮や日焼け果、着色不良・着色遅延の発生が多く報告されており（図4（p.3））、これらに対して全国でさまざまな取組が進められています。

■ 栽培技術による取組

うんしゅうみかんの品質・収量安定化技術として、マルドリ（マルチ被覆＋ドリップ灌水）方式による栽培が進んでおり、気象状況に応じて灌水と施肥を制御することで、品質・収量安定化に加え、浮皮の軽減にも効果を発揮しています。山口県は2019年、全国で初めてIoTを用いた「通信型マルドリシステム」を開発しました¹⁶。インターネット技術を用いたモニタリングや遠隔操作により、気候変動へのきめ細かい栽培管理が可能となり、今後の普及が期待されます。

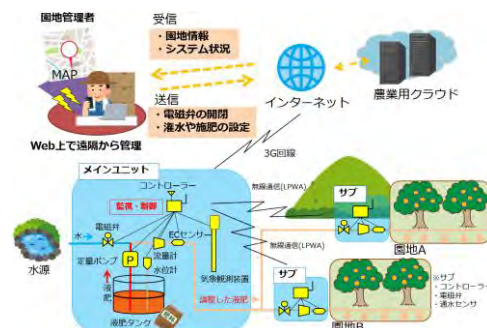


図8 通信型マルドリシステムの概略
出典：「カンキツ栽培における通信型マルドリシステムの開発」¹⁵

■ 対応品種による取組

気候変動の影響による果実の浮皮の発生、貯蔵性の低下等が問題となっていた静岡県は、およそ18年の歳月を掛け、浮皮の発生が少ない晩生品種の「S1200」を育成しました（図9）。県では2020年度より、本品種の産地導入に向けた取組を「気候変動に対応する新成長戦略研究」として重点化し、品種登録出願のほか、生育特性の解明等によりブランド戦略の構築を進めるとしており、生産現場からは本品種の普及が期待されています^{17, 18}。



図9 うんしゅうみかん品種「S1200（育成時系統名）」
出典：静岡県ホームページ¹⁹

■ 温暖化の活用による取組

宇和島市を中心とした愛媛県の南予地域では、気候変動による気温上昇や多雨により主力のうんしゅうみかんに浮皮が発生するなどし、対策技術の確立・普及を図っているところです。一方、県（みかん研究所等）は、かつては冬季の低温のため栽培ができなかったイタリア原産の「ブラッドオレンジ（品種名：タロッコ、モロ）」が、気温上昇により栽培可能になったことに着目し、「全国初のブラッドオレンジの産地化」を目標に、産地化確立事業に取り組みました。2009年より県、市、JA、生産者、食品加工会社等、関係者が一体となって事業を進めた結果、タロッコ、モロいずれも収穫量が大きく増加し（図10）、同地域の新たなブランドが確立されました²⁰。

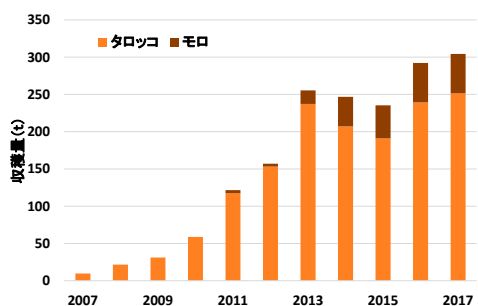


図10 愛媛県のブラッドオレンジ（各品種）出荷量の推移

出典：「特産果樹生産動態等調査」²¹より

上記に示した各産地におけるさまざまな適応策の取組は、いずれも他の産地に先駆けた適応策の事例であり、産地間における優位性の向上につながっていると考えられます。うんしゅうみかんの品種は産地によってさまざまであり、品種の更新が容易には進まない地域もありますが、図1（p.2）に示した気温上昇や、図2（p.3）に示した短時間強雨の増加等の気候変動は、今後いずれも進行すると予測されています。既に産地では種々の影響が発生しており、地域では自治体や産地レベルで中長期的な計画に基づいた適応策の実施が急務であるといえます。

Ⅲ 気候変動に対する適応の進め方

気候変動による影響は、生産している品種や産地によって様々です。そのため、気候変動への適応も各産地が主体的に考える必要があります。ここでは、各産地で適応に取り組んでいくための基本的な進め方について説明します。

■ 気候変動に対する適応策検討の流れ

図 11 は、気候変動への適応の考え方（イメージ）を表しています。気候変動（気温上昇など）の進行に伴い、気候変動による影響は、年変動を繰り返しつつ拡大していくと考えられます（赤矢印）。そのため、気候変動の進行に合わせて適応策を導入し、気候変動による影響を低減させていく必要があります（青・紺矢印）。しかし、適応策の導入には、準備期間が必要であり（青・紺点線）、中長期的な観点で対策を検討する必要があります。

科学的知見を活用した上で計画的に適応策を導入し、気候変動によるリスクをマネジメントしていくことが重要です。

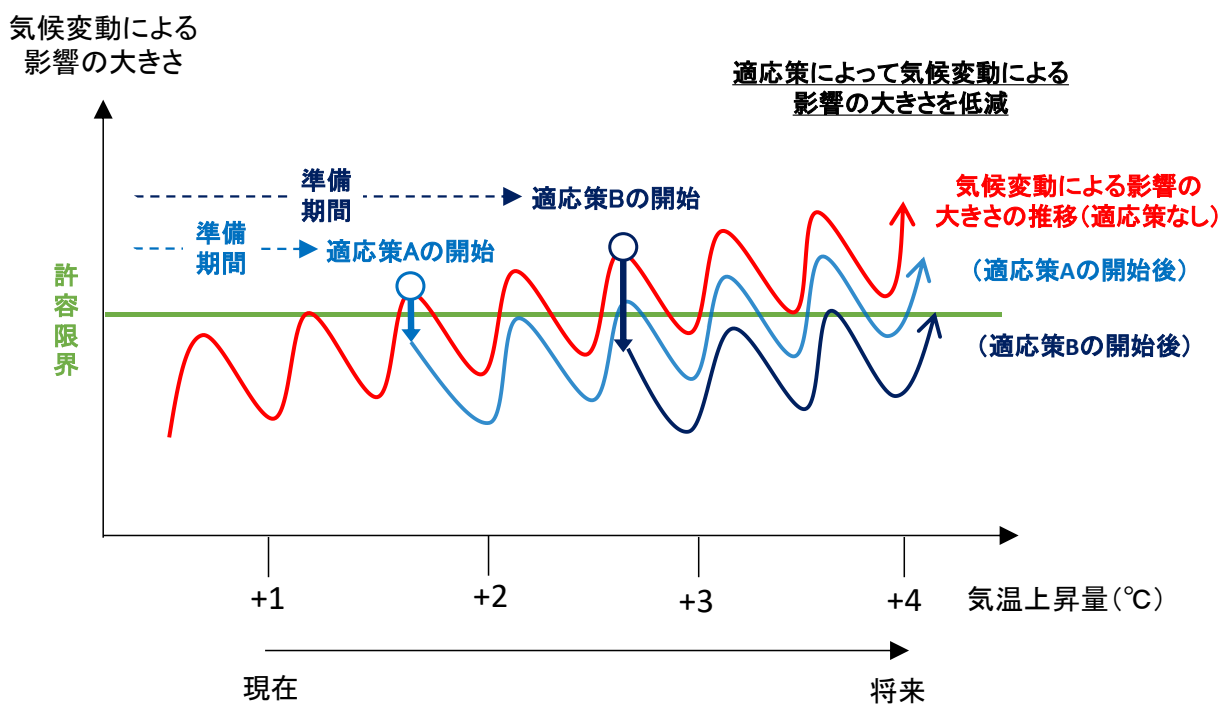


図 11 気候変動（気温上昇）への適応の考え方（イメージ）

本ガイドでは、気候変動に対する適応の進め方として、適応策実行計画を策定し、適応策の評価と見直しを通して計画を改定していくサイクルを想定しています（図 12）。

適応策実行計画では、産地の目標を踏まえ、どのような適応策を、どのタイミングで導入していくかを取りまとめることが重要です。また、農業分野における長期的なビジョンを示す振興計画を策定する場合には、本実行計画を併せて策定することで、より効果的な計画づくりとなります。

本ガイドでは、図 11（p.7）の気候変動への考え方をもとに、適応策実行計画策定の流れを 5 つの STEP として想定しました。各 STEP を進めていくことで、図 13 に示すような適応策実行計画を作成することが可能です。以降では、適応策実行計画を策定するための各 STEP および適応策の評価と見直しについて、その実施内容や主な情報源、参考情報などを説明します。

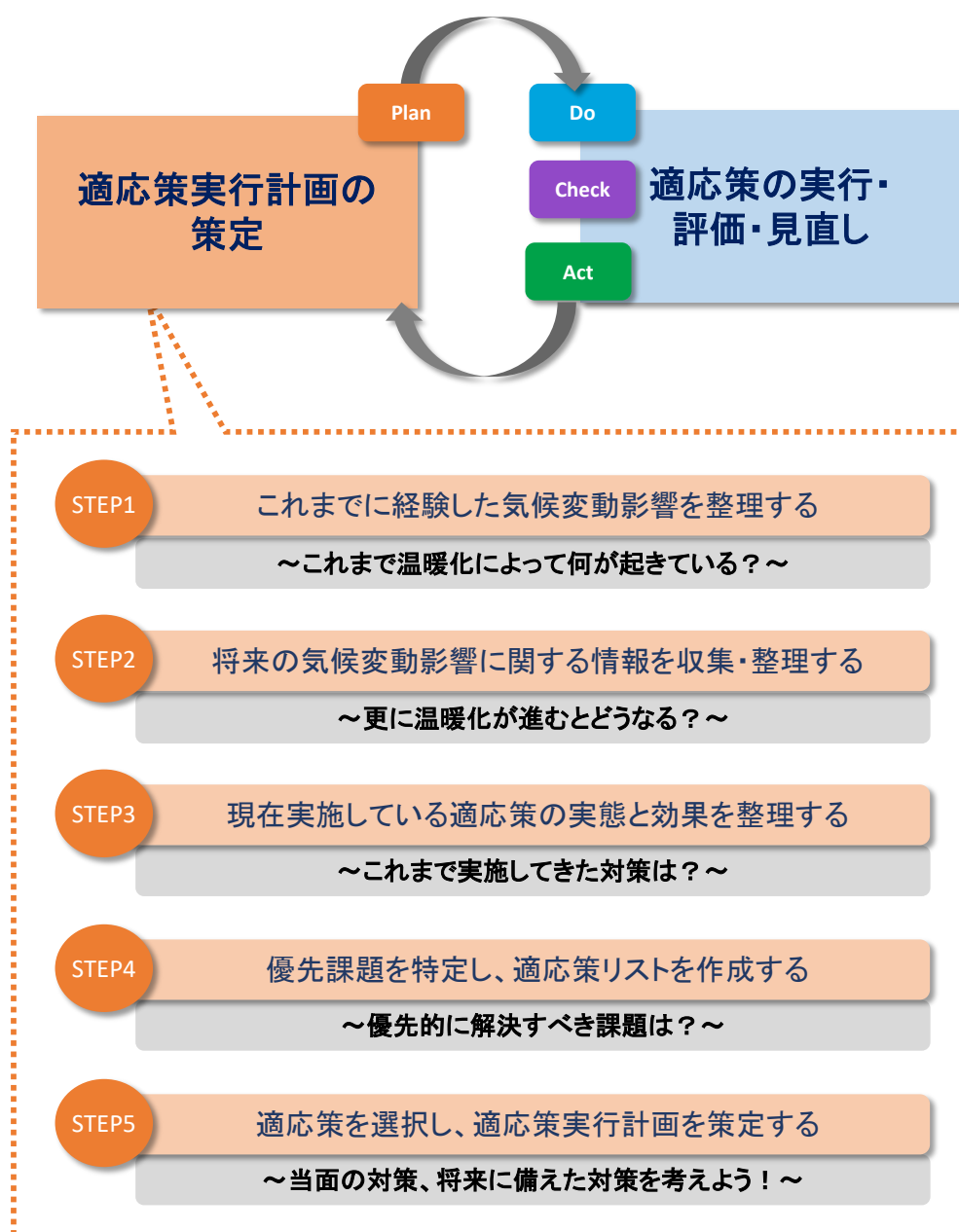


図 12 気候変動に対する適応策検討のフロー

STEP1を基に整理

適応策実行計画

(1) 産地における気候変動による影響

STEP5で設定

(2) 産地の将来の目標

	数値目標

STEP3で情報を収集・整理

(3) 現時点の適応策

適応策のレベル	適応策の目的	具体的な取組内容	効果	課題

STEP4、5で情報を収集・整理
(STEP4でSTEP1、2の情報を活用)

(4) 将来の適応策

適応策のレベル	導入予定年次	具体的な取組内容	想定される効果	関係するプレイヤー

都道府県名	AA県
市町村名	BB市
産地名	〇〇地区
計画主体	BB市

可能な限り数値目標を設定します。
例えば、何年度までに日焼け果を20%軽減させる等

導入する適応策に関するプレイヤー（ステークホルダー）を記載します。

図 13 適応策実行計画のひな型

適応策実行計画の策定

STEP 1 これまでに経験した気候変動影響を整理する

概要

産地内でこれまでに生じている気候変動影響、影響を引き起こす気象要因、影響による被害の大きさ、その発生頻度についての情報を収集し、整理します。

これまでに経験した気候変動影響（気候の変化や気象現象（高温や大雨等）によって生じた影響）は、将来においても生じる可能性が高いと考えられるため、情報を整理しておくことが重要です。また、整理した情報を地域の関係者間で共有することも重要になります。

実施内容

STEP1 では、図 14 に示す 3 つの情報を整理します。はじめに、これまでに気候の変化や気象現象（高温や大雨等）によって産地で生じた影響を、可能な限り品目ごとに収集・整理します。このとき、産地の気候・気象データなどを活用して、影響の原因となる気象現象（着色期～収穫期の高温等）を合わせて整理することが重要です。農林水産省「地球温暖化影響調査レポート」¹⁰では、うんしゅうみかんにおける気候変動影響、発生の主な原因を表 1 のように取りまとめており、産地の情報を整理する際、参考にすることができます。

上記に加えて、うんしゅうみかんの収量・品質データなどを活用し、各影響事例がうんしゅうみかん栽培に与える被害の大きさ、また、その影響の発生頻度を整理することも重要です。STEP1 の整理イメージを表 2 に示します。適宜活用して下さい。

①気候の変化や気象（高温や大雨等）によって、産地で生じた影響事例（可能であれば品目ごと）

②影響を引き起こす気候・気象要因

③①で整理した影響がうんしゅうみかん栽培に与える被害の大きさ、その発生頻度

図 14 STEP 1 で収集する情報

表 1 うんしゅうみかんにおける気候変動影響の事例

気候変動影響	発生の主な原因	収量・品質等への影響
浮皮	果実肥大期～収穫期の高温多雨（9月～12月）	品質・貯蔵性の低下
着色不良・着色遅延	果実着色期の高温（特に夜間）、気温の日較差の減少	品質低下
日焼け果	夏期の高温、強日射	品質・収量の低下
発芽・開花期の前進	低温期の短縮（2月後半～3月）、高温（3月中旬～4月下旬）	収穫・出荷時期の前進、収穫適期が短期化（短縮）し、収穫遅れによる腐敗果実の増加、貯蔵性の低下
生理落果の増加	生理落果期の高温、少雨	品質・収量の低下
病害虫	【黒点病、かいよう病など】発病時期の高温多雨 【グリーニング病】冬季の気温上昇によるミカンキジラミの生息地拡大	収量の低下
腐敗果	収穫期の高温多雨、貯蔵期の高温	品質・貯蔵性の低下
果実の肥大不良	高温少雨（7月～8月）	品質・収量の低下

出典：農研機構資料、農林水産省「地球温暖化影響調査レポート」¹⁰より作成

表 2 これまでに経験した気候変動影響 整理イメージ（※1）

品 種	これまでに生じている 気候変動影響	影響の気候・ 気象要因	品質・収量等への 影響	影響による 被害の大きさ （※2）	影響の 発生頻度 （※2）
青島温州	浮皮	果実肥大期～収穫期の高温多雨（9月～12月）	品質・貯蔵性の低下	大	高
	着色不良・着色遅延	果実着色期の高温（特に夜間）、気温の日較差の減少	品質低下	大	中
	日焼け果	夏期の高温、強日射	品質・収量の低下	大	中
	発芽・開花期の前進	低温期の短縮（2月後半～3月）、高温（3月中旬～4月下旬）	収穫・出荷時期の前進、 収穫適期が短期化（短縮）し、収穫遅れによる 腐敗果実の増加、 貯蔵性の低下	中	中
	生理落果の増加	生理落果期の高温、少雨	品質・収量の低下	中	中

（※1）本表の事例はあくまで整理イメージであり、各産地の実情と異なる場合もあることにご留意ください。

（※2）「影響による被害の大きさ」、「影響の発生頻度」における「現時点」とは平均気温上昇+2℃未満、「将来」とは+2℃以上を想定しています。

本事例では、「影響による被害の大きさ」、「影響の発生頻度」を、それぞれ「大・中・小」、「高・中・低」で表していますが、可能な場合は定量的に示すことも考えられます（「影響による被害の大きさ」：生産量の●%、「影響の発生頻度」：〇年に一度程度で発生等）。

なお、これまでに生じている影響を整理する際には、産地における既存の組織体（自治体や農業協同組合、農業共済組合、地域の関係者等）を活用し、情報を収集することが考えられます。また、産地における農業関係者間や専門家との間でのリスクコミュニケーションも有効です。

整理した情報は、自治体や農業協同組合、農業共済組合、地域の関係者間で共有することが重要です。気候変動適応に向けた第一歩として、多くの関係者が気候変動による影響を認識している環境を構築する必要があります。

主な情報源

✓ 気候・気象データ

気象庁ホームページ²²では、産地に近いアメダスポイントで観測されているデータを入手することが可能です。また、農研機構「メッシュ農業気象データシステム」²³や都道府県の試験場から入手できる場合もあります。

✓ うんしゅうみかんの収量データ・被害データ

農林水産省「作物統計」²⁴や「特産果樹生産動態等調査」²¹、「果樹共済統計表」²⁵から都道府県単位の収量データ・被害データを入手することができます。また、都道府県の試験場が所有している場合もあります。

✓ うんしゅうみかんの品質データ

都道府県の試験場が所有している場合があります。

適応策実行計画の策定

STEP 2 将来の気候変動影響に関する情報を収集・整理する

概要

将来想定される気候変動影響に関する情報を収集し、整理します。

気候変動への適応では、将来変化していく気候変動影響を見据えて取組を進めていきます。そのため、STEP1 で整理した気候変動影響がどのように変化するか、また、これまで経験していない影響が新たに生じる可能性があるかなどを把握することは大変重要です。

実施内容

STEP1 で整理した影響は、気候変動の進行に伴って拡大していくと考えられますが、その拡大の程度は、将来の気候・気象がどれくらい変化するかに大きく依存します。そこで、はじめに産地における将来の気候・気象の予測情報を収集します。

主な情報源

✓ 気候・気象の将来予測データ

国立環境研究所の気候変動適応情報プラットフォーム²⁶では、将来（21 世紀中頃、21 世紀末）の気温情報等が、都道府県単位で提供されています。

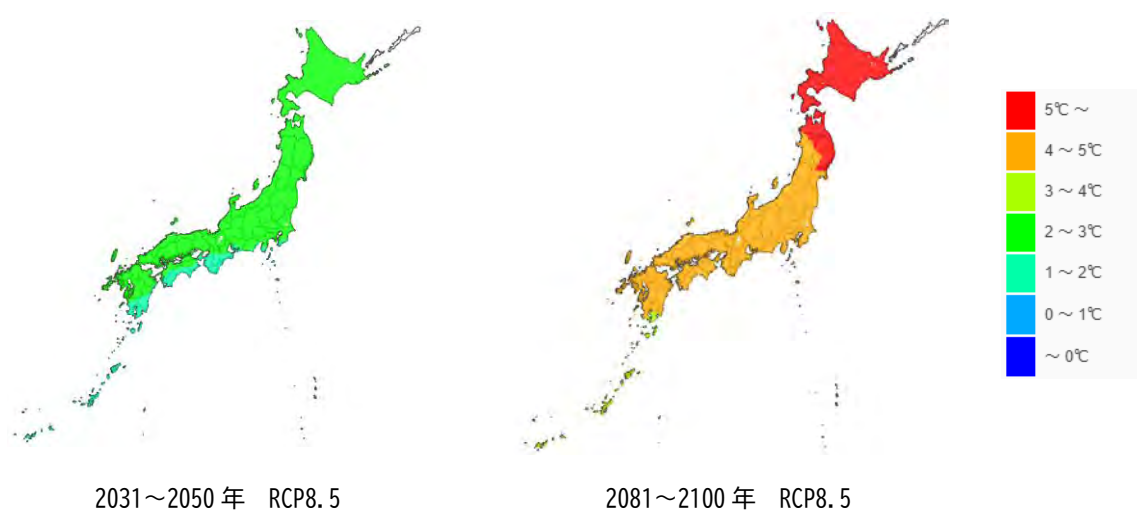


図 15 気温の予測結果（MIROC5）

出典：気候変動適応情報プラットフォーム²⁶

また、農林水産省「気候変動の影響への適応に向けた将来展望」（2019）¹³では、将来（21 世紀中頃）の気温情報等が、地域単位で提供されています。

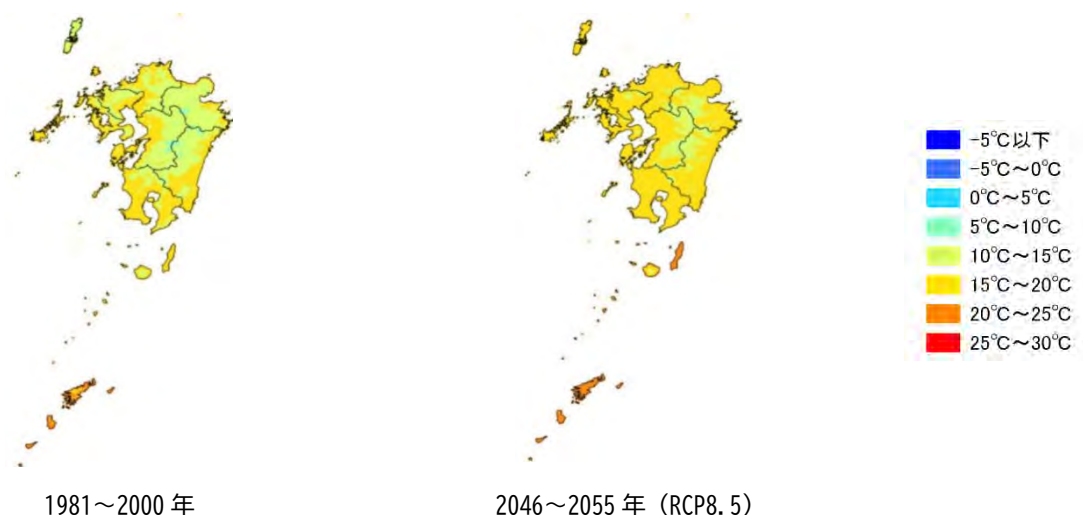


図 16 気温の予測結果 (MIROC5)

出典：農林水産省「気候変動の影響への適応に向けた将来展望」(2019) ¹³

加えて、気象庁ホームページ²⁷では、将来（21 世紀末）の気温情報等が都道府県単位で提供されています。

上記で収集した将来の気候・気象の予測情報や第 I 章の「気候変動によるうんしゅうみかんへの影響（将来予測）」で示した情報をもとに、STEP 1 で整理した影響が、将来どのように変化するか検討します。影響による被害の大きさや、その発生頻度は、現状と変わらないのか、あるいは高くなると考えられるのかを検討することが重要です。

気候変動への適応の観点からは、これまでに経験していない影響が、将来新たに生じる可能性についても、広く情報収集することが重要です。現状において、より高温な地域で生じている影響は、将来的に自身の産地で生じる可能性があります。そのような情報を広く収集することも有効だと考えられます。将来の気候変動影響の整理イメージは表 3 の通りです。適宜参考にしてください。

表 3 将来の気候変動影響 整理イメージ（※1）

品種	気候変動影響を引き起こす気候	気候変動影響	品質・収量等への影響	影響による被害の大きさ（※2）		影響の発生頻度（※2）	
				現時点	将来	現時点	将来
青島温州	浮皮	果実肥大期～収穫期の高温多雨(9月～12月)	品質・貯蔵性の低下	大	大	高	高
	着色不良・着色遅延	果実着色期の高温(特に夜間)、気温の日較差の減少	品質低下	大	大	中	高
	日焼け果	夏期の高温、強日射	品質・収量の低下	大	大	中	高
	発芽・開花期の前進	低温期の短縮(2月後半～3月)、高温(3月中旬～4月下旬)	収穫・出荷時期の前進、収穫適期が短期化(短縮)し、収穫遅れによる腐敗果実の増加、貯蔵性の低下	中	大	中	中
	生理落果の増加	生理落果期の高温、少雨	品質・収量の低下	中	中	中	中

(※1) 本表の事例はあくまで整理イメージであり、各産地の実情と異なる場合もあることに留意ください。

(※2) 「影響による被害の大きさ」、「影響の発生頻度」における「現時点」とは平均気温上昇+2℃未満、「将来」とは+2℃以上を想定しています。

本事例では、「影響による被害の大きさ」、「影響の発生頻度」を、それぞれ「大・中・小」、「高・中・低」で表していますが、可能な場合は定量的に示すことも考えられます(「影響による被害の大きさ」:生産量の●%、「影響の発生頻度」:〇年に一度程度で発生等)。

適応策実行計画の策定

STEP 3 現在実施している適応策の実態と効果を整理する

概要

現時点で実施している適応策に関する情報を整理します。

現在、産地において実施されている適応策の実態と効果を整理することで、気候変動の影響に対する現状の対策レベルを把握することができます。

実施内容

STEP2 で整理した気候変動影響ごとに、現在実施している適応策を整理します。このとき、適応策の効果および導入する（普及させていく）上での留意事項も合わせて整理することが重要です。整理イメージを表 4 に示します。適宜参考にしてください。

表 4 現在実施している適応策 整理イメージ（※1）

気候変動影響	現在実施している適応策	適応策の効果（※2）	留意事項
浮皮	ジベレリン・プロヒドロジャスモン の混合散布	A	着色遅延や緑斑が発生する可能性があるため、 品種や出荷時期に応じて散布時期、処理濃度を 決定する。
	炭酸カルシウム剤の散布	B	果実に白斑が付着し、天候や散布時期により白 斑が残る可能性がある。
着色不良・着色遅延	シートマルチ栽培	B	園地条件（平地や山間部等）に応じて個別に被覆 時期を判断する必要がある。
	エチクロゼートの散布	B	—
日焼け果	樹冠表層摘果の実施	B	果実が小玉になりやすい。
生理落果の増加	ジベレリン散布	B	—

（※1）本表の事例はあくまで整理イメージであり、各産地の実情と異なる場合もあることにご留意ください。

（※2）A: 優れた効果がある、B: 効果がある、C: やや効果がある、D: 効果なし

主な情報源

✓ 各産地で実施されている適応策

地方公共団体の振興計画や試験研究機関の研究レポートなどでは、各産地で現在実施している適応策が整理されており、これらの資料から、気候変動影響への適応に資する対策を抽出することが可能です。また、農業温暖化ネット²⁸「対策情報」や、農林水産省「地球温暖化影響調査レポート」等^{10,29}では、各産地で実施されている適応策に関する情報が提供されています。

適応策実行計画の策定

STEP 4 優先課題を特定し、適応策リストを作成する

概要

産地における優先課題（優先的に対応していくべき気候変動影響）を特定します。また、優先課題を対象に、現在実施していない適応策に関する情報を収集・整理し、適応策リストを作成します。

うんしゅうみかん栽培における気候変動影響は多岐にわたります。そのため、産地に重大な影響を及ぼすと考えられるものから優先的に着手することが、効率的かつ効果的な適応の推進につながります。

STEP4 では、産地における優先課題を特定し、優先課題に係る適応策の情報を収集・整理します。

実施内容

(1) 優先課題を特定する

STEP1、2 で整理した情報や、産地の特徴を踏まえて、産地における優先課題（優先的に対応していくべき気候変動影響）を特定します。

優先課題を特定する方法の一つに、リスクベースの考え方（顕在化の可能性が高く、その被害程度が大きな課題を選定する）の活用が考えられます（図 17）。

(2) 適応策リストを作成する

(1)で優先課題として特定された気候変動影響について、現在実施していない適応策を可能な限り洗い出し、適応策リストを作成します。なお、STEP3 で整理した適応策について、見直す場合には併せて適応策リストに追加整理します。

ひとえに適応策といっても、効果の大きさやコスト、導入に要する期間、適応策に関係するプレーヤー（ステークホルダー）は、対策によって様々です。そのため、これらの情報も合わせて整理することが重要です。適応策リストのイメージを表 5 に示します。適宜参考になしてください。

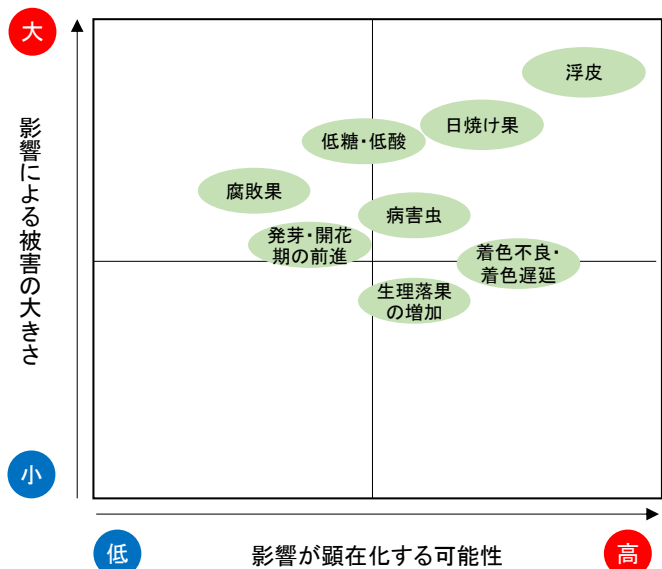


図 17 リスクベースの考え方のイメージ

※ 本図で示されている影響事例の「影響による被害の大きさ」、「影響が顕在化する可能性」は、あくまで整理イメージであり、各産地の実情と異なる場合もあることにご留意ください。

表 5 適応策リスト 整理イメージ（※1）

適応策	適応策の具体的な実施内容	導入によって見込まれる効果	導入に要するコスト	適応策に要する時間（※2）	関係するプレイヤー				課題
					JA	県普及指導員	県農業試験場	農業者（産地）	
栽培技術による対応	植物成長調整剤の利用	熟期促進及び品質向上	薬剤は〇〇円/10aであるが、品質の向上が図られ、上位等級が〇%増加すると収益はプラスになる。→低	短	○	○	-	○	-
浮皮しにくい品種の導入	〇〇地区（〇ha）の作付けを浮皮しにくい品種に転換	昨年の作柄であれば上位等級比率が〇%→〇%に向上	園地の状態や経営状態に応じて改植時期を検討する必要がある。→中	中	○	○	○	○	-
中晩柑品種への転換	〇〇地区の一部を中晩柑「〇〇」に転換	栽培中の高温を回避し、収量・品質が確保できる可能性がある	活用できる事業を組み合わせることが必要。→高	長	○	○	○	○	上記適応策が効果が上がらない場合には、検討が必要。

（※1）本表の事例はあくまで整理イメージであり、各産地の実情と異なる場合もあることにご留意ください。

（※2）短：すぐにも実行可能、中：概ね2～4年、長：概ね5年以上要する

主な情報源

✓ うんしゅうみかんの適応策事例

高温障害に関するうんしゅうみかんの適応策を体系的に整理しています（図 18）。

また、農業温暖化ネット²⁸の「対策情報」や、農林水産省の「地球温暖化影響調査レポート」¹⁰では、各産地で実施されている適応策が紹介されています。自身の産地より高温な地域で実施されている適応策は、将来的に活用できる可能性が考えられるため、適宜確認しましょう。

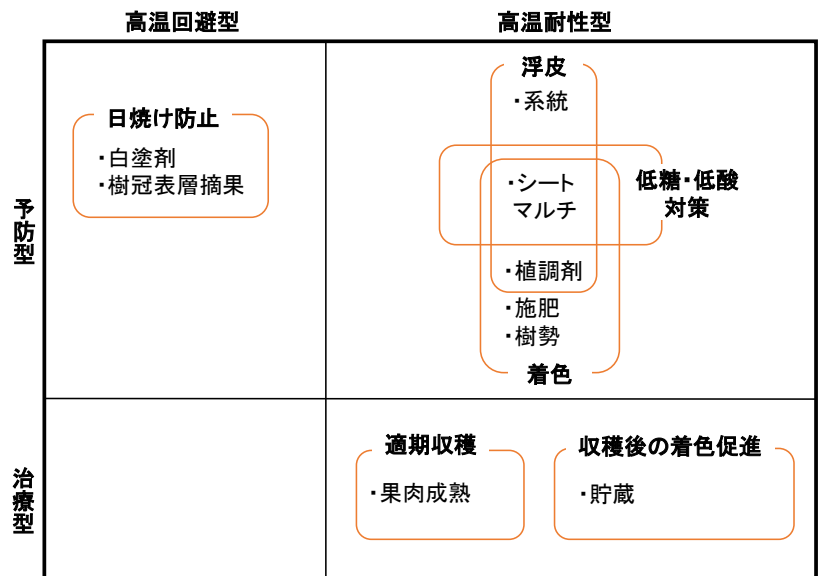


図 18 うんしゅうみかんの高温障害の適応策例

提供：杉浦 裕義 氏、岩崎 光徳 氏（農業・食品産業技術総合研究機構）

適応策実行計画の策定

STEP 5 適応策を選択し、適応策実行計画を策定する

概要

産地の目標とする姿を踏まえ、今後実施していく適応策を検討・選択し、適応策実行計画を作成します。

実施内容

(1) 産地の目標とする姿の設定

気候変動リスクを踏まえて、今後も適応策なしで産地が継続していけるのか、現在の栽培品目で生産を継続するため、収量重視でいくのか、また、品質重視でいくのか、他の作物の導入を進めた方がよいのか等、産地の目標とする姿を設定します。

(2) 今後実施する適応策の選択

STEP3 や STEP4 で整理した適応策に関する情報や（1）で設定した産地の目標とする姿をもとに、今後導入していく適応策を選択します。

気候変動への適応の考え方（図 11（p.7））で示したように、気候変動への適応では、将来の気候変動影響の拡大を勘案し、計画的に適応策を導入していく必要があります。そのため、短期・中期・長期で時間軸を区分し、各期間において、どのような適応策を進めていくか検討することが重要です。

STEP3 で整理した現在実施している適応策は、短期・中期的に継続していくことが一般的だと考えられます。それらに加えて、短期・中期・長期の観点からどのような適応策を追加していくべきか、STEP4 で整理した適応策の効果やコスト、そして実装までの時間等も考慮し、選択していくことが重要です。

(3) 適応策実行計画の策定

STEP4 で整理した「導入によって見込まれる効果」や「導入に要するコスト」、「時間」等を考慮し、また、(2)で選択した適応策に関する情報をとりまとめ、適応策実行計画を策定します。必ずしも現時点では具体的な取組内容が明確になっていなくとも、将来のどのタイミングで、どのような適応策を導入する計画であるのか、明記することが重要です（図 19）。

果樹栽培における適応策には、3つのステージがあると考えられ、短期的に栽培技術による対応を行いつつ、中・長期的には品種転換や品目転換の必要性が考えられています（表 6）。

表 6 適応策のステージ

ステージ名	適応策の内容	特徴
ステージ1(短期的)	栽培技術による対応	・現在の品目・品種で対応可能
ステージ2(中期的)	高温耐性品種の利用	・産地ブランドの維持が可能 ・初期投資が必要
ステージ3(長期的)	品目転換、園地移動	・気候変動影響への適応力は大きい ・産地レベルでの取組が必要

出典：「気候変動適応技術の社会実装ガイドブック」¹¹より作成

STEP1で収集・整理した
気候変動影響を記入

適応策実行計画

(1)産地における気候変動による影響

・普通温州中心に浮皮がほぼ全域で発生しており、特に気温の高い南部地域で多くの被害が生じている、また、南部地域では日焼け果も多く発生している。

STEP5(1)で設定した
産地の目標とする姿を記入

(2)産地の将来の目標

	数値目標
・栽培技術による対策の確立・地域内への普及を通して浮皮等の高温障害の軽減を図る。	〇〇品種の日焼け果及び浮皮を〇〇%削減する。
・将来の温暖化に備え、浮皮しにくい品種の「〇〇」の改植を開始する。	
・更に将来の温暖化に備え、「〇〇」への品目転換の可能性を検討するための試験研究を開始する。	

(3)現時点の適応策

STEP3で収集・整理した現在実施している適応策を記入

適応策のレベル	適応策の目的	具体的な取組内容	効果	課題
栽培技術による対応	浮皮の発生軽減	ジベレリン・プロヒドロジャスモン混合散布	中生以降の品種で効果大	実施マニュアルの作成
栽培技術による対応	日焼け果の発生軽減	樹冠表層摘果の実施	広い地域で日焼け果を軽減	小玉果発生への対策検討
栽培品種の変更	浮皮・日焼け果の発生軽減	浮皮が少ない品種である「〇〇」の導入	温暖化の影響を受けにくい	栽培マニュアルの作成

(4)将来の適応策

適応策のレベル	導入予定年次	具体的な取組内容	想定される効果	関係するプレーヤー
栽培技術による対応	2022年	効果的なシートマルチ栽培の推進	現在より高温下でも被害が少ない	農業者、JA、県普及指導員
栽培品種の変更	2025年	浮皮が少ない品種である「〇〇」の導入を拡大	現在より高温下でも被害が少ない	農業者、JA、県普及指導員、県農業試験場
栽培品目の変更	2025年	温暖化に強い中晩柑の「〇〇」の栽培試験の開始	現在より高温下でも被害が少ない	農業者、JA、県普及指導員、県農業試験場

STEP4で整理した適応策リストとSTEP5(1)で
設定した産地の目標とする姿を基に、
今後導入していく適応策を選択し、記入

図 19 実行計画の作成イメージ

適応策の評価と見直し

概要

適応策の進捗状況やその効果について、定期的に評価し、適宜見直しを図ります。

適応策実行計画で取りまとめた適応策については、進捗状況とその効果を定期的に評価する必要があります。

また、STEP2 で活用した気象・気候の将来予測情報や、第Ⅰ章の「気候変動によるうんしゅうみかんへの影響（将来予測）」で示した予測情報は、今後も予測精度が高まっていくことが期待されます。新たな予測情報や産地における農業関係者間や専門家との間でのリスクコミュニケーションを踏まえ、図 20 に示すような PDCA サイクルに沿って適宜見直しを図っていきます。

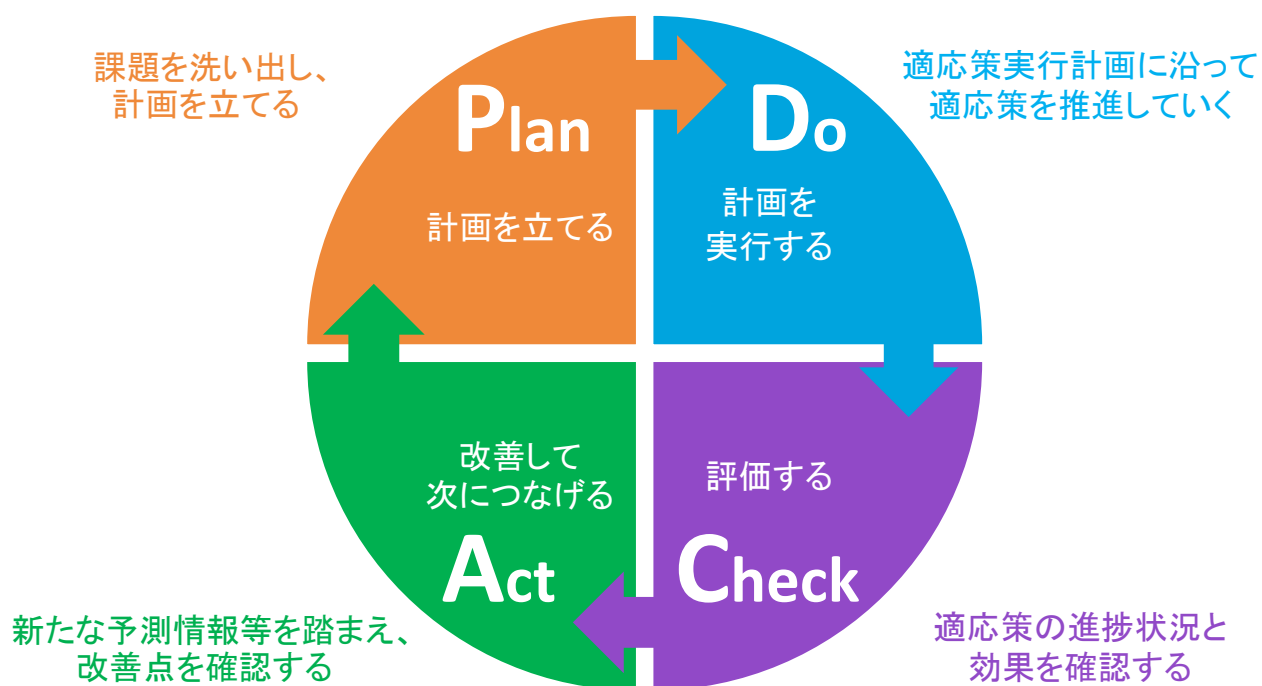


図 20 PDCA サイクルのイメージ